

---

# いつもきみのそばに・・・ ~愛海 篇~

苺タルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こつもきみのそばに・・・～愛海 篇～

### 【Zマーク】

Z9083C

### 【作者名】

莓タルト

### 【あらすじ】

主役は舞輝だけじゃない！あたし大谷愛海も、舞輝が達弥さんに恋してる最中、廉くんに恋してたんだから！

(前書き)

じつじょうじゆ。

いつきみは今回舞輝の親友愛海のお話です。  
取つつけたよひな話しでじめんなさいね。  
つじつま合わないこともおそらく出てくると思こますが、 作者は健  
症とつじじよろしくお願ひします。

## いつもきみのそばに・・・～愛海 篇～

いつのきみのそばに・・・を見てくれてありがとう。  
今回は、あたし大谷愛海オオタニアミの恋のお話をしようと思つた。

始まりは、ある日届いた1通の手紙からだつた・・・。

あたしは、県内に通う高校2年生。

クラスメイトの舞輝マキ・暁子アキコ・千春チハルの4人で、大ファンのs - w i nスイングのレギュラー番組にダンスをビデオ投稿したんだよね。

それが、見事に予選通過！

決勝大会に出ることになったの。

大好きな廉くんレジに会えると思ったら、なんとしてでも出なきやつて思つて、嫌がる千春と舞輝を無理やり巻き込んで、収録に向けて練習を始めたの。

いちを、悪いと思つてるのよ・・・(汗)

嫌がる一人にOK言わせたし。

で・も！

生で廉くんに会えるんだよ！

ファンならずえつたい行くでしょ？

風邪をひこうが、盲腸になろうが一生で一度しかないかもしけない

このチャンス！

逃したくなかったんだよね。

まあ、練習で何度も衝突はあつたものの、無事収録までに仕上がる  
ことができた。

本番当日。

リハの前にストレッチしていると、スタッフが「おはよ〜い!」や「こま  
ーす！」って言ったの。

あたしたちが最後のはずなのに、誰だろ?って見たら田の前に s -

w i n g がいるじゃん!

生廉くん・真人・拓・達弥!

もう、失神寸前で大興奮だつたんだから!

しかもね、芸能人だからってお高くとまつていなくて、とつてもフ  
レンドリーに話しかけてくれたの!

あたしが想像したまんまの廉くんだった!

自分たちのリハの後、s - w i n g のリハが見れて更に大興奮。収  
録が終わって、あたし思い切つてサインと握手お願いしてみたんだ。  
もう、ダメもとで聞いてみた。

でもね、いいよって!

優しい笑顔の廉くんの周りがキラキラしている。

廉くんは、にこりと笑つて握手とサインをしてくれたんだあ。

廉くんの手。

おつきくてスラアツとした指なの。

ボツつて顔が熱くなっちゃつた。

「やうだ!」

廉くんがね、突然言つてあたしの耳に顔を近づけてきたの。

廉くんの顔ドアップにドキドキ(汗)

小声でね、

「Jの後、一緒に食事でもしない? 18時に＊＊＊つてお店で待つ  
てるからみんなでおいでよ。」

だつて！

はいっ！つて思わず返事しちゃつたけど・・・。

やっぱ芸能人つてこんなもんなのかなあ？

軽いっていうか・・・。

廉くんは舞輝たちにも「みんなできてね！」って言つてゐる。

みんなと一緒ならなんとかなるか！

廉くんと食事ができるんだもん、こんなチャンス滅多にないよ！

でも、ちゃんとみんなと話しかわなきやね！

テレビ局の前で輪になつて会議が始まつた。

芸能人との食事に千春が心配そう。

当たり前だよね・・・。

「 もちろん行くでしょ？」

興奮気味の暁子。

彼女もs-wi<sup>re</sup>fanファンなんだ。

あたしも暁子に便乗して乗り気。

「 確かに、あたしたちにもあとでねつていつてたけど・・・。」

千春はあくまで乗り気でない感じだつた。

「 行くだけ行つてみれば？」

つて、舞輝が珍しく意見したの！

舞輝は、中学からの親友なんだ。

17歳にしては、若干複雑な失恋がきっかけで、最強の人見知りで冷めた子になっちゃつたんだよね。

そんな舞輝が、あたし以外に唯一心を開いたのが暁子と千春。舞輝が言つた一言でみんなが納得して行くことになつたんだ。なのにね！

「じゃあ、決まつたことあたしは帰るよ。」

舞輝つたら駅に向かつて歩き出したの。

だから、あたし舞輝の腕掴んで引き止めたよ。そしたら、千春も参戦してくれたの。

「冷静に見れる舞輝が必要！」って。

千春、結構キツイこと言うの（笑）。

千春の真剣な説得に舞輝も降参してみんなで行くことになつたわけ！つていうか・・・

『この二人、かなり乗り気だから興奮してなにやらかすかわからな  
い。』

つて千春の言葉がややひつかかるけど？

まあ、そんなこんなで時間まで少しあつたから、みんなで時間つぶしてから廉くんに言われた場所に行つたの。

でもね、そこはとても高そなお店だったの。うちらのお財布事情、じゅともとても・・・。呆然としてると、廉くんが入り口に出てきたの。

「なんだ、来てたんじやん！入りなよ。」

廉くん、あたしたちのこと迎えいれてくれたんだ。  
廉くんの私服もかっこいい！  
つい見とれちやう。

したら、千春が、

「あたしたち、そんなにお金持つてないんです、今日はこれで失礼します。」

つて・・・。

ホントに帰るの?

暁子も残念そう。

仕方ないよね・・・こんな面やつなお店じや。

「誘つたのは「ひさだから、「ひさしあるよー。」

つて、廉くんが言つてくれたのー  
やつたあ！

そこはね、綺麗な焼肉屋さん。  
座敷になつてゐる個室に入ると、他のメンバーが「待つてたよー。」  
と、迎えてくれた。  
席に着くと廉くんが、

「「めんな、俺の安易なひらめきで誘つひさしたから、緊張させた  
よな？」

つて謝つてきたんだ。

「いえー!とんでもないです、嬉しかつたですか?」

あたし慌てちやつた。

そんなこと言われると思わなかつたから。

各自に頼んだソフトドリンクで乾杯して芸能人との食事会が始まつ

た。

話しあは廉くんから切り出してきた。

「昔から仲がいいの？」

「高校に入つてからの親友です！」

「愛海ちゃんがムードメーカーだね！」

テレビで見るいつもの廉様スマイルで言つた。

「そんなこと……」

テレながら言つてるけど、こうみえて失神寸前なんだから！  
食事も済んで、廉くんが中庭に出ようつて言つたから、みんなで出  
てみるとことにしたの。

みんなで出てつたはずなんだけど、気づいたらバラバラに分かれて  
て廉くんと二人だつた。

「ホント、軽はずみなこと言つてごめんな。」

廉くん、反省顔。

「そんな、気にしないでください。」

「芸能人は軽いって思われたくないんだ。」

子犬みたいにシュンとする廉くん。

確かにあたしも思ったよ。

芸能人つて軽いのかなつて。

「じゃあ、なんであたしたちを食事に誘つたんですか？」

「愛海ちゃんにもう一度会いたかつたんだ。」

「あたしですか・・・」

「うん・・・もつと仲良くなりたいって。」

そりや、あたしだって憧れの廉くんと仲良くなりたいけど・・・。廉くん頭をくしゃくしゃつけてして、

「友達からお願ひできませんか!」

「ええ!????」

廉くん手をあたしの前にズンと出してきた。  
うそおおおおお!

「あ、あの・・・みるじくお願ひします。」

あたしは廉くんの手を握った。

今わかったよ。

廉くんは違うって。

悪い人じやないって。

ケータイの番号とメールアドレスを交換して、お部屋に戻ったんだ。  
なんとね!

舞輝と達弥さんが一緒に戻ってきたの!

舞輝、人間不信プラス男不信でもあるわけ。

そんな舞輝が達弥さんと一緒にいたの?

でもね、達弥さんは舞輝に気があるっぽいんだ。

食事中。

ふとあたしの視界に入った達弥さんがみつめる先が・・・。  
舞輝だったの。

黙々と食べ続ける舞輝をにこにこしながら見ていたの。黙々と食べる舞輝に突つ込んでみたけど、舞輝だから（笑）シカトされた。

「やつとじ飯食べたね！ おいしい？」

達弥さんが舞輝に話しかけてる。

「ほつとじてください。」

なのに舞輝つてば冷たく返してたし。

もう～舞輝はあ！

おもわず、「舞輝！」つて睨んだけどやつぱりシカト。

一方、冷たくされてもこじこじしている達弥さん。

達弥さんは舞輝に気がある！ つてあたしは思つたんだよね。それを裏付けることがあつたの！

そつ遅くない時間に解散になつたから、つていうかね！

「若い子をあんまり遅くまで連れまわしたくないから解散ー！」

つて廉くんがそう言つたの！

すごい大人つて感じ！

今時いないんじやない？

てか、話しずれちゃつた（笑）

このあたしの興奮を舞輝に延々聞いてもらつてから帰宅したの。そこで、早速廉くんにメール。

とっても楽しかつたですー！ つて。

したら、廉くんからすぐ返事があつて、

【今から電話しても平気?】

つて!

もちろんです! つてメールをすると、すぐに着信が入つて。

「達弥さん、舞輝に気があるっぽいって感じませんでした?」

「達弥は、舞輝ちゃんに惚れてるよ。あいつにしては珍しく自分から番号とメアド聞いたみたいだし。」

「そうなんですか? 舞輝なんも言つてなかつた。」

「達弥、あんまり自分から人を好きになることないんだ。」

「なんですか?」

「よくは聞いてないけど、昔、すげえ好きだった子に振られたらしい。それ以来、自分から好きになつた子いないみたい。何人か彼女いたけど、向こうから告つてきたから付き合つみみたいな。長く続くわけがないよな。」

「やうだつたんですか。なんか、応援したくなつちゃいました。」

舞輝のこともあるし。

もし、達弥さんが舞輝を変えることが出来たら・・・。

「俺は応援するつもりだけねー。」「あたしもー!」

結局・・・

朝の4時まで話しちやつて・・・

だつて、話したいことたくさんあつすぐて時間が経つの早いんだもん。

廉くんもこんな時間までじめんつて。

あたしも学校だつたけど、廉くんも仕事でさあ。

あたしは遅刻すればいいけど、廉くんはそうにはいかないもんね。

“売れっ子人気アイドル”だし。

その売れっ子アイドルに気に入られた、あたし。

廉くんは一番人気あるんだよ！

そんな人とこうしてご飯食べて、メールして電話して。

夢じやないよね・・・？

廉くんの話しじゃ、達弥さんはやつぱり舞輝に気があるらしい！

そう思つて、舞輝に突いてみたんだよね。

みんなも驚いて、舞輝に聞いただしたからかなあ？

次の日から学校こなくなつちゃたんだよね。

もづ、早1週間。

舞輝にメールしても、電話しても応答なし。

家に行つてみたけど、ダンスに行つてるつて舞輝のママが。

その夜、廉くんから着信があつて。

「愛海ちゃん、元氣ないね。」

廉くんあたしのテンションの低さでわかつたらしく。

「舞輝がもう、1週間学校来てなくて。なんかあつたのかなあ？」

「達弥に聞いてみようか？今日さ、達弥に舞輝ちゃんどどづつて  
聞いたらメールはしてるつて言つてたし。」

あたしや千春たちのメールはかえらないのに？

達弥さんに返してるんだ・・・

なんかちゅつとヤキモチ。

「ちゅつと待つててー。」

廉くん電話を切ると、数分後またかかってきた。

「「」めん、たまに返つてくるだけだったみたい。学校のことはなんも聞いてないって。」

だよね！

安心したあ。

ん？

達弥さんとたくさんメールしてるほうだが、舞輝にひとつではいいのか？あたしにとつても喜ばしいこと？

いいのいいの！

今はいいの！

でもね、とうとう週間にたつたの。

「「」ないねえ～」

なんてお昼休みに言つてると、舞輝が好物の牛丼持つて教室に現れたの！

話しを聞くと、オーディションに受けるために踊りこみしていたらしく。

舞輝つて、もともと自分のことをあまり話さないんだあ。

でも、すつじい心配してんだからあ（涙）

見事合格して、夏に舞台に立つんだって！

ともあれ、舞輝が元気に学校きてくれてよかったです。

ブウウウウウウ～。

ん？

ブウウウウウウ～

ケータイ？

あたしのだ！

なんと、廉くんから。

【もしもしし～愛海ちゃん？】

「もしもしし～どうしたんですか？」こんな時間に廉くんから電話してくるなんて。

【今日、仕事で愛海ちゃん達の学校のそばまで来てたんだ。授業終わつたらライブにでも行かない？】

「近くにいるんですか？」

【外みてじりん】

あたし猛ダッシュで廊下に出た。

すると堀に横付けしたワンボックスカーから廉くんが手を振つてゐる。

【学校終わつたらみんなで出でおこでよー】

あたしが放課後待てますか！

「あとでと言わば、今から行きます！」

電話切つて教室に戻つて千春たちに小声で報告。暁子は行く気満々で、すぐに準備を始めていた。あたしは舞輝にも同じことを話したの。したら舞輝は、

「こつてりんしゃー

伏せつたまま手振つてゐる。

だと思つた。

達弥さんもいんのに連れて行かないあたしじゃないわよ！

「あんたもくるのー（怒）」

寝てる舞輝を無理矢理引つ張つてつたの。

抵抗しても動じない。

あたしに引つ張られるまま廉くんの車に乗り込んだの。

廉くん、サボつてでてきたこと心配してたけど、とにかく出発。  
一時間のドライブで着いた所は海浜公園。  
各自にバラけて散歩をしたり海で遊んだり。  
あたしは廉くんと波打ち際でおしゃべり。

「寒くない？」

「はい。」

「ホントに大丈夫だつたのか？学校。」

「わかりません（笑）でも、たまにはいいんじやないですか？」

「今日は許す！俺達もそつだつたし。舞輝ちゃん学校きたんだね！  
よかつたね。」

あたしは舞輝が舞台のオーディションを受けるために休んでいたことを話した。

「愛海ちゃんは優しい子だね。友達のこと本気で心配して。」

「舞輝は特に付き合い長いし、舞輝は、あんまり人に心開かないから、1週間も2週間も学校こないと、なんかあつたじやないかって思つちやうの。」

「そつなんだ。でも、舞輝ちゃんにとつて愛海ちゃんは必要不可欠だと思うな。なんだかんだで愛海ちゃんについてきてるじやん。収

録も、今日も。」

「無理やりですか？」

「でも、瀬海ちやんから離れないでいるじゃないか。瀬海ちやんの「」の呪のわれは、舞輝ちやんのためにしてあるのかと思つていいだよ。」

確かにやつ・・・

舞輝に笑つてほしくてわざとバカやつてゐる。

「だから、俺の前では無理しなくていいよ。」

え？

「瀬海ちやんにだつて落ち込むときだつて、泣きたいときだつてあるだろ？そんなときは俺が聞こえてあげるよ。」

「ありがとう。」

廉くん、ホントに優しい。

軽い気持ちで言つてないつてわかるよ。

ファンから“好きな人”に変わつていいですか？

真人さんが鬼「」によつて言つてきて、仲間に入つた。

向こうでは、達弥さんが舞輝に付き合つて（舞輝は頼んでないとか言つてただけ）。海を見ている。

達弥さんファイト！

廉くんが無邪気な顔ではしゃいでいる。

廉くん、ありがとう。

大好き！

廉くんからのその後のメールで、達弥さんが舞輝に本気らしいこと教えてくれた。

舞輝はどうなんだろ？

あたしは、舞輝が心配なんだ。

舞輝の持ってるトライウッド。

実はね、舞輝は15歳で妊娠して、そのときの彼と婚約していたの。

あたしはもちろん祝福したよ！

でもね、あるとき泣きながら舞輝が家に来たの。

「舞輝？どうしたの？」

「俊太（ショント）……出てっちゃった……」

田那さんになる予定だった俊太が、重荷に耐えらんなくなつて逃げちゃつたの。

その数日後、他の女連れて歩いている俊太を追っかけたときにお腹に激痛が走つて、そのまま救急車で運ばれて流産してしまつた。

病室で舞輝が

「重いのは俊太だけじゃないのに……あたしだって、お腹が大きくなればなるほど、責任つてもんが重くのしかかってきて。何度もおろすほうがよかつたのかなつて。でも、あたしには無理だよ。殺すことできなかつた。」

15歳の舞輝にも俊太にも、この出来事は安易なことで重荷だつた。

俊太はいい、逃げればいいのだから。

でも、舞輝は？

お腹にいる生命を一人で抱えていかなければならない。

もちろん、舞輝は一人でもやつしていくつて言つたと思つ。

その裏腹にある不安は？

俊太と舞輝の子供なのに、なんで舞輝だけが抱えていかなくてはならないのか。

退院後、舞輝が家に遊びに来たとき、

「お腹も軽くなつたことだし、またダンス戻ることにした。」

そう言つてる舞輝に笑顔がなかつた。

舞輝の大好きはダンス。

踊つているときの舞輝は舞輝じゃない。

学校にいる舞輝とは別人になる。

舞輝は、あの出来事を忘れ去りたいかのように踊りに明け暮れていった。

だからね、高校に入るように舞輝に説得したの。

「しばらく人にかかわりたくない。」

つて舞輝が言うから、あたしもいる今の中学校薦めたの。

女子高だし。

男いないしね！

舞輝の顔に笑顔が戻つてくることはなかつたけど、クラスに馴染むこともなかつたけど、いつも舞輝とみんなでつるんでられるのが楽しかつた。

舞輝には・・・できたらまた恋して欲しい。

でも、今の舞輝なら嫌だつたら「嫌（怒）」つていつと思つんだよね。

本人に聞こつとしても、お昼ご飯食べたら、昼寝しちゃうじ。

行きも帰りも部活の関係で一緒にならないし。

人のことばかり！って思つて いるでしょ？

あたしもそう思つ！

でも、これでも切ないとか、苦しいとかあるんだよ。  
だって相手は芸能人だよ！

忙しいし、メールだつて一日一通。

来ないとき、だつてあるし。

来ないと、やっぱあたしなんか・・・って思つて。

ファンの立場で言わせてもらえば、彼女なんていたら凄いショック  
だもん。

だから、ファンに申し訳ないつていうか。

だいたい廉くんの彼女じゃないじゃない？

やっぱ不安だよ・・・。

好きな人が芸能人。

壁が厚い気がするな。

そんなときに、また舞輝つたらやらかしてくれて！

高校2年を最後に学校辞めるつて！

しかも、先生だけ知つて修了式のあのホームルームで初めて聞  
いたの。

確かに、やけに今日はよく笑うなつて思つてたけど。  
お別れなんて・・・思いもしなかつたよ。

放課後・・・静まり返つた教室で舞輝はあたしたちに話してくれた  
の。

あたしたちは黙つて舞輝の話を聞いた。

舞輝が全て話し終えると、あたし堪えきれなくなつて

「何も黙つてなくたつていいじゃない（怒）」

猛抗議したの。

「『めん。もうすぐお別れだねって、そんな話ししたくなくて。』

舞輝の気持ちもわかるけども！」

すると、千春が、

「あたしは応援するよー。寂しくなつちやうけど、友達辞めるわけじゃないんだし。」

つて言ったの。

そうだけどさあ・・・・・。

「それによ、あのTMCの予科生でしょ？ あんな有名な劇団に入つたなんて鼻高いしー！」

暁子まで・・・。

二人とも、あえて精一杯明るく振舞つてるのかもしれない。  
あたしが一番寂しいのを知つているから。

「ありがと。」

舞輝は、一人に言った。

「愛海、愛海はなんかないの？ 舞輝が一番応援して欲しいのは、愛海なんじゃない？」

あたしの背中を擦りながら千春が言った。

「舞台があると呼んでよね。」

「うん。」

「連絡してこなかつたら許せないんだから。」

「うん、わかった。必ずする。」

あたしそのまま黙っちゃった。

「愛海？」

「ん？」

「ありがとー！」

舞輝が笑顔を見せた。

やっぱ笑ってるほうが舞輝だよ・・・

帰りの電車の中で、よつやく聞くことができたんだ。

「ねえ、舞輝。」

「ん？」

「達弥さんってこと・・・」

「知らないよ。愛海達に言わないで達弥さんと言いつつー。」

そりゃそりだ。

舞輝はそういう子だもん。

「思つたんだけど、達弥さんって舞輝のこと好きなんだと思つ。」「知つてゐる。」

意外な舞輝の返答にあたしひくりだつたよ。達弥さんいつの間に・・・。

「知ってるつて？」

「海にドライブ行ったときに言われた。」

「ホントに？返事は？しないよね・・・」

舞輝が言つわけがない。

「言つてない。」

「達弥さんなら、大丈夫だと思う。ネガティブに考えないで進んでみてもいいと思う。誰でもいいってわけじゃないんだよ、でも、いい機会だし・・・」

「愛海、ありがと。心配してくれてるんでしょ？俊太のこと。」

あたしの言葉を遮つて舞輝は言つた。

「・・・うん。」

「もつ、俊太のことは平氣だよ。たださ・・・」

「同じ」と繰り返すのが怖い。

「うん、そう。」

舞輝はため息をついてシートに寄りかかった。

わかってるよ、舞輝。

舞輝がどんなに傷ついてるか。

『恋』がどんなに怖いか。

でも、自分で切り開いていかないと先に進まないよ・・・。

舞輝が劇団の寮に入るまでのわずかな時間で、あたしたちは旅行に行つたり遊びに行ってプリクラをたくさん撮つた。

4人でつるむ最後の思い出作り。

そして、舞輝はあたしたちに見送られて東京へ出発した。

3年生に進級したあたしたちは、早速進路。  
あたしは迷つてんだあ。

進学か就職か。

大学行くなら、踊りをもつと学びたい。

それが駄目なら就職だよね。

大学行けば、好きな勉強も出来て、まだまだ遊ぼうと思えば遊べるよね。

就職したら、時間に追われて好きなこともできなくなる。  
ん~。あたし的に進学なんだけど、ママやパパがOKするか。  
夕食のとき、思い切つてママとパパに話してみたの。  
したら、あつせつOK!

なんだとと思つ?

「舞輝ちゃん有名な劇団に入つたんだろう? いいなあつて思つてわあ  
! はつはつはつはつは。」

だそうです・・・

単に自分の子もやうならねえかなあ? つて思つてる親バカです。  
でも! OKもらつたんだし、それに向けてお勉強するのみ!

夏休みから予備校通いだしたんだ!

そして夏は、舞輝の初舞台!

実は7月から始まつてるんだつて。  
でも地方公演なんだとか。

メインの東京公演が8月で、みんなで行くんだ。

廉くん経由で達弥さんが是非一緒につて言つから、舞輝に内緒でチ  
ケット余分にお願いしたんだ。  
きつと喜ぶよね!

ちなみに、廉くんとは順調です！

今度遊びうね！って言いながらまだ叶ってないの。

仕方ないよね。

廉くんはアイドルだから。

でも、急かしたりしないの。

重く感じてほしくないから。

友達から！って言われても友達から恋人になつたわけでも、縁が切れただけでもない。

電話で話して、メールしてるだけで十分だよね。

忙しくてメールが来ないと、正直不安になるよ。

忙しいんだろうってわかつても、もうメールも電話も来ないんじやないかなって思つたり。

毎日送るメールうざいかな？

疲れてるのに文章長かつたかな？

まだかな・・・

まだかな・・・

来ないなあ・・・(涙)

つてね。

セツナイヨ・・・

廉くんに会いたいな・・・。

早く、舞輝の舞台見に行く日になんないかな。  
待ち遠しいよ。

「ねえ、舞輝から手紙来たよー。」

チケットとチラシと手紙が昨日届いたの！

早速、学校に持つてみんなに見せたんだ。

「これが舞輝？」

チラシに写ってる衣装を着た舞輝を見て千春が指差した。

「そだよー。」

「全然感じが違つような・・・。」

暁子も半信半疑。

「学校で見てる舞輝しか知らないからね。」

「会場で待つてます！だつて。楽しみ！」

千春、自分のチケット握つて嬉しそう。  
でもね、ホントに驚くのはこれから。

観劇当日。

開場したロビーであたしたち3人はすでに集まっていた。

「お待たせ！」

入り口から手を上げてこっちに向つてくるのは、廉くんと達弥さん。  
久しぶりに会う廉くん。

元気そうー。

思わずニヤケちゃう（笑）

「間に合つてよかつた！パンフ買ったの、席で見よつよー。」

全員着席して、パンフを一枚一枚めぐつていく。

「あ、舞輝！」

あたしが指さすと、みんな絶句したの。

そこには、今までに見たことのない舞輝が写つていた。

衣装を身に着けた舞輝。

素顔の舞輝。

なんだか嬉しい。

あたしの大好きな舞輝がここにいる。

さうにびっくりしたのは、開演してから。  
舞台を観にきたのだから当たり前だけど、舞輝が歌つて、踊つて、  
演技をしている。

いつも教室にいたあの時の舞輝じゃない。

発表会でみた別人の舞輝とはまた違う。

こんな生き生きした舞輝をあたし以外誰も見たことがなかったの。  
カーテンコールでは、出演者に声援を贈つてゐる人がいたんだ。  
あたしたちも舞輝に声援を贈ろうつて話し合つて。  
そして、舞輝が登場！

するとね、すごい声援が上がつたの。

「舞輝ちやーん！」

つて。

圧倒されながらも、あたしたちも精一杯声を出して舞輝を呼んだよ。

客席に笑顔で手を振る舞輝。

舞輝が笑顔だよ！

あたしたちにも気づいてくれて、大きく手を振ってくれたの。

興奮冷めないまま終演。

物足りなかつたあ！

終演後、あたしたちが向うのは楽屋。

そこには既に出待ちをする人でごつた返してた。

搔き分けて入り口に向つと、「誰の知り合いだる？」つて、羨ましそうに見てくる人たち。

ちょっとだけ鼻が高いな

途中、廉くんに気づいた人で少しそわついたけど、なんとか楽屋口に入つて回避したの。

人気アイドルの廉くん知らない女の子なんていないもんね。舞輝に言われた通り、受付で舞輝を呼んでもらつと、5分くらいして舞輝が出てきた。

「舞輝いー！」

あたしたち、駆け寄つて舞輝に抱きついたやつた。  
だつて久しぶりなんだもん！

「みんな来てくれてありがとー！」

舞輝も一緒になつて飛び跳ねて。

4人ではしゃいでいると、舞輝の動きがピタッと止まつた。

達弥さんに気づいたみたい。

舞輝があたしの顔を驚いた顔で見るから、

「驚かせつと思つて、内緒で呼んじやつた。」

あたし、ペロッと舌を出して言つと、舞輝は慌てて達弥さんたちの方に挨拶に行つた。  
とりあえず、飯食べに行つたり、舞輝を支度せしむる樂屋に戻すと、

「舞輝が明るくなつてゐる・・・。」

つて暁子が言つたの。  
ホントに・・・。  
よく笑つてゐる。

「あれがホントの舞輝なのかもよ?」

千春が暁子に言つた。

「中学のときから知つてゐるけど、昔はもつと笑つてたよ。」

あたしは思ひ出すように言つた。

30分くらいで舞輝が支度を済ませて、樂屋から出つてきたの。

でもね、あたしたちたちと樂屋口から出ると、

「舞輝ちゃんが出てきたー！」

つて、大騒ぎ。

握手・サイン・写真と次から次に求められて、エレベーターに乗り込むまで30分もかかったの！  
凄い！舞輝つて人気あんだね。

やっぱ友達として鼻高いよ！

顔色ひとつ変えないで笑顔で応える舞輝にも関心しちゃった。  
いつも無愛想なのにな（笑）

エレベーターの扉がしまった途端、全員で「はあ～」って疲れ果ててた（笑）。

「俺達も捉まっちゃうといんなもんだよな？」

廉くんが達弥さんに振った。

「もうだよ。気にする」となによー。」

達弥さんも気にしない模様。

さすが、アイドル！

でも、廉くんも嫌な顔ひとつせずに、ファンの女の子に握手したりするんだよね・・・。

ダメ駄目！

何贅沢なこと言つてんのよー！

仕方ないじゃない！

あたしたちが向つたところは、あたしと廉くんのお勧めのレストラン。

たまたま劇場付近のレストランでお気に入りのお店が廉くんもよく行くところだったの！

凄い偶然でしょ？

食事をしながら、近況報告したり、随分盛り上がったんだよ。一段落したところで、あたし行動に出たんだ。

「あつ、あたしこれから用あるんだよね。悪いけど帰るねー。」

すると、「あたしも。」つて、千春や暁子も支度を始めた。  
実はね、達弥さんと舞輝を一人っきりにしようつ作戦！なのです。

3人で一芝居うつたのよ！

舞輝も一緒に帰るつて席を立つから、

「舞輝はまだいなよ。せつかく達弥さんに久々に会えたんだから！。

」

「でもあ・・・」つて言つ舞輝に、あたしたちは「じゃあ～ねえ～」  
つてさっさと退散。

あらかじめメールで作戦を廉くんにも伝えてあつたから、後から店  
出てきあたしたちの後追つかけてきた。

「なんて言つて出て来たんですか？」  
「駅まで送つてくるつて言つて！」

廉くんも楽しそうー

「ねえ、あたしたちはこれからどうする？」

あたしが聞くと、千春と暁子つたり一やけて、

「あたしたちは2人で渋谷に遊びに行くの。」

「ええ！あたしは？」

「やあね、愛海には廉君がいるじゃない！」

完全にはめられた。

暁子も千春も一人で作戦立てた模様。

「廉くんだつて、予定あるかもしれないじゃない！」

とりあえず抗議してみた。

だつてそんな図々しいことできな「じゃん！」

「俺はこの後予定ないけど?」

「うわお！」

「ほらー！廉くん、愛海お願ひしますねー！」

一人はそう言つと、駅に向かつて行つちゃつたの。  
そんな、心の準備があああああ！

「どうか行こうか？」

廉くんが優しい笑みで言つ。

「はい。」

とつあえず、千春と暁子に感謝しないとね！  
念願の廉くんとのデートだもん。

「あんまり遅くなれないよな？映画でも観ようか？」

「あたし、門限ないです。」

「でも、ダメ。」

シコン・・・

ちょっとがつかりしてると、頭に廉くんの大きな手が。  
見上げると、

「また遊べばいいじゃん!」

廉君スマイルで頭ナーデナード。

そんなことされたら、キュンってなっちゃう。

期待しちゃうよ・・・。

「うん。」

「映画でいい?」

「はい!」

今は、廉くんとの時間を楽しもう。

大好きな廉くんとの時間を。

また、いつ会えるかわからないもんね!-

廉くんと、映画館へ行つて、一番最新の映画を見る」としたの。  
おつきいポップコーン持つて席に。

「映画見るなら」とくらいでかくなきやー!」

だつて(笑)

見た映画はラブコメディー。

笑いあり、涙ありで忙しかつた。

笑つて涙が出てきたかと思えば、今度はジーンとしちゃつて涙。

結局泣きつぱなしだつたわけ(笑)

廉くんも一緒になつて泣いてんだよ!

いいね、こういうデート。

ポップコーンで喉が渇いちやつたみたいで、お茶しにカフュに入つたんだ。

頼んだアイスコーヒー一気飲み。

どんなだけ喉渴いてたの?

グラスを窓に向かふと満足気に「ふはあ～」つむ。

「ふつ」

あたし思わず吹き出しちゃつた。

「何? そんなに面白かった?」

「面白かった。どんなだけ喉渴いてたんだらつて。」

「すんごく乾いてた。ポップコーン、口の水分みんな持つてたやつ

んだぜ。」

「あははははははは

「愛海ちゃん、笑いやめ。」

それでも腹抱えて笑つてゐるあたし。

「まあ、いいや。楽しそうだから。」

廉くんが微笑んだ。

「すみません。つぼに入つちやつて。」

「また、デートしたいね。」

「やうですねー。」

れつかも廉くん言つてたよね?

『また遊べばいいじゃんー』つて。

ホントにデートしてくれるのかな?  
期待していいの?

廉くんが駅まで送つてくれて、そこでお別れ。

「またメールするね！」

廉くんが手を振った。

あたしも手を振って、改札を通った。

舞輝もうまくやつてるかな？

舞輝つてよりも、達弥さんが頑張んないと。

達弥さんに会えて嬉しそうだつた！と、思つ（笑）

数日後、廉くんのドラマ出演が決まったの！

喜ばしいことなんだけど・・・。

また忙しくなつちゃうな・・・。

レギュラー番組も何本も持つてて、ただできえ忙しいのに。  
あ～あ。

たまにくる着信や、メールで廉くんを知つていくわけだけど。  
知れば知るほど、廉くんが遠い存在に思えてきたんだ。

廉くんが好きなこと。

廉くんの価値観。

廉くんの趣味。

あたし、ダンスと歌以外に趣味もとりえもないから・・・。  
ひとつでも共通のがあれば、また会話も楽しいんだろうな。  
そお考えると、なんにも知らないファンでいるほうが楽だったかも。  
だつて、テレビの中の廉くんみて、勝手氣ままに妄想膨らませれる  
でしょ？

ホントの廉くんなんて知らないんだから。

こんな人あんな人で！

白馬に乗つた王子様！みたいな人！

つて、勝手に人柄まで妄想しちやつて。

切ないとか・・・苦しいとか・・・ないよね。

季節は秋後半。

肌寒い温度から、いよいよコート羽織るくらいにまで冷え込んでき  
た。

事件があつたんだ。

あたしに！ではなく、舞輝たちに。

達弥さんがスクープされたんだ。

『熱愛発覚』で。

あたし、びっくり仰天だつたよ！

廉くんから連絡あつて知つたんだけど。

急いでコンビ二行つて雑誌見たら、『写つてるのは間違いなく舞輝じ  
やない。

どうじうこと？

舞輝が知つたら、また舞輝壊れちゃう。

また廉くんから着信が。

【今、達弥に連絡取れたよ。】

「なんだつたんです？」

【潔白らしい。詳しくはまだ話せないらしいんだ。】

違う・・・よかつた。

これなら舞輝が知つても大丈夫かも。

【舞輝ちゃんに連絡とつてもられないか？そんで、違うこと伝えて  
欲しいんだ。】

「達弥さんから言えばいいじやないですか。」

【それがさ・・・もう知つちゃつてたみたいで、弁解する前に電話  
切られたみたい。】

あちゃー。

舞輝の傷、抉つたことになる。

今頃、泣いてるかもしない。

近くに居れば・・・今すぐ行つて抱きしめてあげられるの。

「多分、無理だと思います。でも、やってみますね。」

【頼むよ。達弥、すげえ落ち込んでて。】

「でしううね。でも、きっと舞輝はもつと落ち込んでます。」

あたし、そのまま電話切つて、すぐに舞輝に電話したの。

プルルルルルルル・・・

出ない・・・。

出るわけがないよ。

これでわかつたこと。

舞輝落ち込んでていい。

舞輝は達弥さんに恋している。

廉くんに時間がかかりそつてメールで伝えて、舞輝に電話し続けた。電源が切られてよつと。

舞輝のことを心配しつつも、あたしには、高校生活最後の学祭がやつたんだ。

この学祭でダンス部最後のステージがあるの。

後輩に振り付けを教えて、メインの3年の振り付けを考えて・・・。

頭ん中パニックさ！

振り付け考えるのに煮詰まつてて、なんとなく舞輝に電話入られてみた。

【もしもし。】

出た！

「もしもし？元気？」

【「めんね、たくさん電話くれてたのに・・・気持ち落ち着かなくて。】

「うん、わかるよ。」

【達弥さん、たくさん電話くれるんだ。メールも。】

「舞輝。あたしも忙しくて、廉くんに連絡しないからわからぬけど、達弥さんは達うつて言つてるんだって。詳しいことはまだ話せないらしいけど。」

【そつか。でも「めん無理だ。】

「わかつてゐよ。でも、信じてあげて。」

舞輝から返事はなかつた。

「舞輝？」

【やう！冬公演に出演決まつたのー。】

無理やり話しをえてきた。

そうとう落ち込んだんだ・・・。

「ホント？おめでとうーーまた見に行くからね。」

【うさ。愛海がくるなり、頑張らなきや。】

トーンは変わらず低いけど、喜んでるつてわかつた。

「あたしも、学祭が月末にあるんだ。」

【随分遅くない？】

「なんかね。作者の都合で。」

「

【ほつ。随分だね。】

「どうもすみません・・・b y 作者。

「いつの振り付けで煮詰まつて。」

【やつか。】

「でも、舞輝と話すと湧いて来るんだよ。」

【念を送つてゐるから。】

そのトーンで冗談を言つ。

【月末じゃ、多分いけないな。学祭。愛海のダンス見たかった。】

「残念。」

【卒業式、行けたら行くよ。みんなでお祝いしよ。】

その夜は、進路の話しどたたくさんした。  
体育大に舞踊専攻希望だつて言つたら、

「愛海にぴったりだよ！頑張つて受かつて。」

つて！

舞輝の話しほね、

仲良しの男友達ができて、大分異性と話せるようになつたこと。  
その3人でよくつるんじること。

ちょっと寂しいけど、舞輝が変わつていつてることはとても嬉しい。  
向こうでまた一人になつちゃうんじゃないかなって心配だつたんだ。

「翔つていうんだけど、達弥さんと会つた帰りに雨が降り出して傘持つて駅まで迎えに来てくれてたんだ。そんとき、男と会つてただろ？つていうから、多分・・・好きな人つて言つた。」

舞輝の口から達弥さんは“好きな人”と出た。

「舞輝・・・」

「だからね、落ち着くまで時間かかりそうなの。心配かけて『めんね。』

「いいよ。」

もしかしたら・・・

舞輝は、また傷つく前に終わらせようとしてるかもしない。  
あたしは、達弥さんが違うと言つてることを受け入れるまでに時間がかかるほうで事は進んでほしいものだが・・・。  
恋つてなかなかうまくはいかないもんだ。

ちょっと時間が遅くなつたけど、廉くんに報告しなきゃ。

ブルルルルル・・・

少しすると、もしもしつて声が。

「廉くん? 遅くに『ごめんなさい、今平氣?』

「ごめん、充電がないんだ。」

ちょっと切りたそな感じ。

充電がないんじゃしあがない。

「ごめん、舞輝のことだったんだけど、明日の朝メールするね。おやすみ。」

「おやすみ。」

少し・・・いや、かなり寂しいかも。  
もう・・・寝よう。

朝起きると、廉くんからメールが入っていた。

『さつ あは』めん。

ここにとこスケジューる詰まつてるくに充電できてないんだ。

落ち着いたら、遊びに行こうね!』

落ち着いたらか・・・。

いつ落ち着くんだろう? ?

落ち着く日なんてあるんだろうか・・・?

落ち着く日なんてなかなかやつてこなかつた。

芸能界のことなんてよくわかんないけど、ドラマークール終わるまでスケジューる詰め詰めなんだつて。

レギュラー番組も持つてるし。

きっと疲れてんだろうな・・・。

頑張つてしか言つと出来ないけど・・・。

彼女じゃないけど・・・彼の近いところの女の子。  
微妙だ・・・。

彼女じゃないから、わがまま言えない。  
嫌われたくないから、我慢する。

無理すんなて言つてくれたけど・・・無理しちゃうよ。

廉くんから久しぶりに着信がきたかと思えば、達弥さんからの伝言  
だった。

舞輝の舞台観に行くなら一緒にって。

舞輝と話すきっかけを作ってくれないかつて。

舞輝のためならー

だけど・・・それだけ?

いくひ忙しいからって、それだけで電話切られやがりのまん心細いよ。

結局、また自分のことより人のことになつちやつた。

達弥さんと日にちを決めて、一人で劇場へ行つた。

終演後、楽屋に行くと、舞輝はアカデミーの人たちと盛り上がりつていた。

多分・・・舞輝に抱きついてる男の子が翔くんだと思つ。それみて達弥さん買ひ物あるからつて出て行つちやつたの。

駅前の喫茶店でつて。

これつてヤキモチだよね。

舞輝と駅前の喫茶店で待ち合わせて、一人達弥さんと舞輝の到着を待つ。

その間・・・ホントは舞輝たちのこと考へてる場合じやないんだよ。廉君から全然連絡こなくなつちやつたの。

忙しいつて達弥さんも言つてるけど。

もう、廉君から卒業しようつかな。

「お待たせ!」

舞輝が到着。

達弥さんどこまで買ひ物行つてるの?

舞輝をみると、自分のことより舞輝のことになつちやつ。

達弥さんは連絡とつてないつて言つ。

もう、いいんだつて。

いくない!

つて言おうとしたら、「よくないよ」つて達弥さんよつやく來た。

舞輝に仲直りするんだよって言つてお店をでた。

“ ありがとう ”

なんて言われても・・・

廉君・・・会いたいよ。

その夜、舞輝から電話があつて仲直りしたつて報告がきた。  
素直に嬉しい。

舞輝には頑張つてほしいから。

なんで・・・あたし人のことばっかで、自分のこと聞いてもらわな  
いんだろう?

一人で抱えて・・・答えがみつかんなかつたら終わりにしちやう。

でも、あたしには“受験”つてのがありますから!  
廉くんのことは受験が終わつてから・・・つていうよりも、受験勉  
強で紛らわせたい。

正直、ギリギリだつたんだ。  
おかげで受かつちゃつたよ。

廉くんとは連絡取つてない。

あたしからメールしないとホントにメールしてこないのね。

あたしつて廉くんの何?

もう、どうでもよくなつてきた。

千春や暁子も進路が無事決まって、卒業式まで遊びまくった。  
カラオケ行つたり、1泊2日で旅行に行つたり!

舞輝も誘つたけど、春休みみてないんだって。

## 卒業式。

式のあと、校門のあたりで舞輝を待ち伏せ。  
その後お祝いしにみんなで食事に行くんだ!  
多分マック（笑）

キョロキョロして舞輝を発見!

「あつ、舞輝だ。行くよ・・・せえーの!」

で、3人で舞輝に抱きついた。

また感じが変わったように思えた。  
達弥さんとうまくいってるってことかな?  
案の定、高校生といつたらファーストフード・  
最寄駅前のお店でお祝い。  
今日はちょっと贅沢にアップルパイつけた  
お祝いだから（笑）

「千春はどこに進学?」

「あたしは、保育の専門。」

「暁子は?」

「あたしはアパレルに就職。」

「みんなぴつたしじゃん。おめでとうー!」

「愛海は舞輝と同じダンスの勉強するんでしょ?」

千春には未だにみちの世界らしい。

「愛海とあたしのじやえらくちがうんじゃない？愛海が入ったの舞踊専攻でしょ？ただ踊つてるつてわけじゃないんじやない？」

「そりだよ。」

「ねえ、最近愛海の口から“廉くん”って聞かない。」

「え？」

「そりいえば……」

千春も暁子も散々あたしのお惚氣聞かされてたからなあ。

「なんかあつた？」

舞輝まで心配そりとする。

「なんもないよー。いたつて順調です。ただね、廉くん忙しいみたい。ドラマにでたりしてたから。」

「廉くんは歌つて踊つてのほうがいいー。」

暁子が言つたの。

あたしもそり思ひ。

俳優やつてる廉くん、今注目浴びてるけど、みんなと踊つて歌つて  
る廉くんのがかっこいい。

「めずらしく反論しないのね。」

千春、目をパチクリ。

「だつて、あたしもそり思ひんだもん……」

「まあ、狂つてるファンより安心だ。」

暁子がポテトをつまみながら言つた。

“ファン”

トイレに立つたとき、廉君から着信があった。

【久しぶり。元気?】

「うん。」

【メールも電話もできなくてごめんな。】

「忙しいんだから・・・」

【愛海ちゃんも忙しかったの? あんまりメール来ないから。】

電話の向こうでノックする音が聞こえた。

廉くん、ちょっと待つててつて言つて電話器押せたんだと思つ。でも、聞こえちやつたんだよね。

「れんーー。今日まだじこくう? 早く支度してよ。ト待つてるからね。」

「うん。今行くから。」

つて。

相手は女人で間違いない。

どこに行くの?

打ち上げ?

その子とは遊びに行って、あたしとは会つてくれないの?

もう限界だった・・・

【もしもし?】めんな。】

「うん。大丈夫、早くこきなよ。女の子のと。」

【え？】

「忙しいんだもんね。あたし、次会えるの楽しみにしてたんだけど、順番待ちだつて知らなくて・・・待ちくたびれちゃつた。もう、メールも電話もしないから。」

【愛海ちゃんっ！】

「じゃあね。」

電話を切つた。

「そうだよね・・・夢見させてくれただけだよね。本気になっちゃつたあたしバカだ。」

泣くわけにはいかない。

舞輝たちが心配する。

特に舞輝には心配かけたくない。

舞輝が知つたらきっと必死になると想ひつ。

「愛海？」

ハツとして振り返ると、舞輝が立つていた。

「大丈夫？ ぼけえつとして。」

「うん。」

なんか感じていたかもしねない。でも、なんも聞いてこなかつた。

みんなと別れて、電車に乗つた。後輩や舞輝にもらつた花束はもう元気なくしてゐる。あたしもそつだ。

シオシオになっちゃったよ。

早く家に帰つて泣こ。

おもこつきつ。

さつと明日には吹つ切れる・・・はず。

駅の改札を出ると、あたしの前に誰かが立ちふさいだ。てつくり改札通りたいんだと思つて。

「すみませ・・・」

立ちふさがつてたのは、キヤップを深くかぶつた廉くんだった。

「おかえり。」

「なんでここに・・・」

「もつ、メールも電話もしないなんて言つから。」

「・・・」

「来て。」

「れん・・・」

あたしの手を掴んで歩き始めた。

廉くんの手の温もりがあたしの心臓をフル稼働させた。

「どこ行くの?」

「いいから。」

引っ張られるままについていくと、突然ピタッと止まつた。

「ここで待つてて。」

つて廉くんは花屋に入つていつた。

あたしに花でも買つてくれるのかしら。

数分しておつきな花束持つて廉くんが出てきた。

「これ、あげる。」

「え？」

「卒業式だつたんだろ？」

「うん」

「おめでとう。」

「ありがとう。」

おつきな花を抱えると、廉くんは微笑んだ。

「やつぱり似合つ。愛海ちゃんがたくさんの花に囲まれたらやつとかわいいんじやないかつて思つて。」

「やつかな・・・みんなに言つてゐんじやないの？」

思わず、ふてくされた言葉が出てきた。

「やつきの怒つてゐんだよな？」「めん・・・」

「謝んなくつていいよ。あたし、廉くんの彼女じやないし。勝手に廉くんと会える日待つてただけだから。」

「愛海・・・」

廉くんがあたしの「一テトを掴んで引き寄せた。

「俺・・・自信なくつた。愛海ちゃんはもつとふわわつて人がいるんじやないかつて。」

「何・・・言つてんの？」

「いつも一緒にいてやれないからわ。寂しいのに、寂しいって言わない気がすんだ。大丈夫だよって言つて。でも、大丈夫じゃなくなつたらどうつか行つちゃうんじゃないかなって思った。だから今の関係でいいのかもしけないって思つたんだ。」

意味がよくわからなかつた。

「俺、勝手だよな・・・他の奴とのほうが幸せかもつて思つてるのに、メールで繋がつていればまだ自分のことみてもらえてるつてどうかで安心してたんだ。ホントにもうメールも電話もしないからつて言われたら、いてもたつてもいらんなくなつた。自分の前から愛海ちゃんがいなくなることにがやっぱ耐えらんなかつた。」

廉くんバカだよ・・・

「ホント勝手だね・・・あたしの幸せ勝手に決めないでよ。自分からは滅多にメールしてこないくせに、メールないからつて忙しいのか聞いてきて。他の奴のがあたしにふさわしいとか言つて、離れたらやつぱ耐えらんないって。結局あたしつて廉くんのなんなの?メール友?女友達?あたし、よっぽど今のが辛い。不安だよ。」

目にいっぱい涙がたまつちゃつた。

「「めん。なるべく一緒にいれるようにするよ。会えないときは必ず連絡する。だから、俺の彼女になつてくれませんか?好きなんだ。」

「

ホントに?」

あたしのこと好きつて・・・

あたし、これからも廉くんのこと好きでいいの?」

「もつと早く言つてよ。バカつ」

「『めん。』

「あたしも廉くんが大好きです。これからも廉くんのこと好きでいいいの？」

「いいに決まつてんじやん！でも、俺のが愛海ちやんのこと好きだな。」

「あたしのが廉くんのこと好きだよ。」

「俺だつて！」

「あたし…」

大きな花束は、あたしと廉くんに挟まれて少しへしゃんこになつちやつてたけど、きつと許してくれるよね！

「ねえ、愛海つて呼んでいい？」

「さつさ言つてたじやん！」

「さつさはつてい…・・・」

「許す…」

廉くんと、お家までの短い道のりをテート。しつかり手をつないで。

「 もういえば、あの女の子のことはいいの？」

「 え？ ああ、姉貴？」

「 アネキ？」

「 おねえさん？」

「 うん、旦那と喧嘩して俺たち来たんだ。憂れ晴れに付きましたの  
マジ大変でさあ。」

「 ミステイクっ！」

てつくり彼女が女友達かなんかだと思つてた。

「 も、そだつたんだ。」「めん・・・なんか勘違いしてたみたい。」

頭にポンッと手が乗つかった。

「 嬉しかつたけど。ヤキモチ。」

「 ひとつ意地悪な顔して言つ。

「 や、ヤキモチなんかじゃないもん！」

終  
わり

(後書き)

今回書き方変えてみますた。  
いつきみ・・・いつまで続くんやれ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9083c/>

いつもきみのそばに・・・ ~愛海 篇~

2010年12月14日18時18分発行